歯科医師が病院で活躍

連携進める福岡市の二つのケース

脳卒中後の口腔ケア、入れ歯調整、嚥下支援…

脳卒中を起こすと、一命を取り留めても口や喉の機能に障害が残り、口から食べたり話したりするのが難しくなる場合がある。それがやがて生活の質(QOL)を低下させ、命を縮めてしまいかねない。こうした状況を防ごうと、歯科医師とタッグを組み、入院患者の口腔(こうくう)ケアや嚥下(えんげ)機能回復支援に取り組む病院がある。「口の健康は全身の健康につながる」と歯科との連携を進める福岡市の2病院の取り組みを紹介する。

(下崎千加)

■開業歯科医が協力

「はい、かんでください」「ちょっと入れ歯を締めましょうね」…。福岡市中央区の博愛会病院(145床)。60代男性の病室を、地元で開業する樋口起三歯科医師が訪ねた。口の中をくまなく見て、義歯を調整した。

男性は3月上旬に急性硬膜下血腫を起こし、救急病院で手術を受けた後、リハビリ目的で転院してきた。左半身にまひがある他、かむ力や飲み込む力が低下。救急病院では管を通して栄養分を取る経管栄養を受けていたため、歯茎が痩せてしまい、義歯が合わずに外れるようになった。

博愛会病院の病室で樋口起三歯科医師(右)の訪問診療を受ける男性(中央)

「いつまでも口から食べられるように」

理学療法士や言語聴覚士が関わって毎日訓練し、ミキサー食は食べられるようになったものの、刻み食や一般食には義歯が不可欠。言葉がはっきり発音できない構音障害を治すためにも必要だ。そこで樋口歯科医師にSOSがかかった。

樋口歯科医師は病院の看護師や理学療法士、歯科衛生士からあらかじめ男性の症状を聞き、のみ込む様子をエックス線で撮影した動画を見た上で診察。ぴったり合うようになった義歯に男性は「これでおいしいものが食べられる」と喜んだ。

こうした取り組みは「口から食べる」をキャッチフレーズにリハビリに力を入れる同病院が、2014年に福岡市歯科医師会と連携協定を結び、地域の歯科医院に入院患者の診療をお願いして実現した。定期的に訪問している歯科医師は現在5人。月1回、医師らスタッフが嚥下機能に問題がある患者の支援方法を検討するカンファレンスにも参加する。

訪問歯科診療の普及で、高齢患者の多い病院を歯科医師が訪れるケースは珍しくなくなってきたが、ここまで病院スタッフと情報共有しているのはまれだ。岡崎哲也副院長は「口腔ケアや嚥下の支援は、患者さんの身体や認知の状態によってやり方が全く異なる。口の中のことは私たち医者では限界があり、専門の歯科医師と協力して患者さんのケアに当たりたい」と話す。

■院内に歯科を開設

歯科医師を常勤で雇い、入院患者の口腔ケアに力を入れる病院もある。福岡市西区の福岡リハビリテーション病院(228床)は1998年に歯科医師を採用し、歯科を開設した。

きっかけは、脳卒中で口から食べられなくなった患者が誤嚥(ごえん)性肺炎で亡くなるケースが相次いだことだ。せっかく一命を取り留めても、義歯が合わずに十分な食事が取れず回復が遅れ、入院が長期に及ぶ人も。そこで当時の院長が「リハビリには口腔ケアが欠かせない」と踏み切った。

見る見る効果が表れた。97年は肺炎で亡くなる入院患者が38人いたが、歯科開設翌年の99年には8人に減少。その後も1桁に抑えられ、入院期間も短くなった。

入江暢幸院長によると、口から食べることで唾液が分泌されて口の中がきれいに保たれ、胃腸の動きも活発化して元気が出る。生きる喜びにもつながる。一方、鼻や胃ろうからの経管栄養が長期にわたると、誤嚥性肺炎のリスクが高まる。胃腸が弱って下痢や便秘も起こしやすくなる。「なによりロから食べられなければ自宅へ帰るのが難しくなる人が多く、QOLが大きく低下しかねない」

今は歯科医師3人、歯科衛生士4人が新規入院患者全員をチェック。嚥下機能などに問題があれば、歯科が内科、脳神経外科、リハビリ担当のスタッフらと情報交換しながら、特に入院後1~2カ月間は集中的にケアを行う。開始が早ければ早いほど効果があるという。「さまざまな合併症予防のためにも、歯科はなくてはならない存在」と入江院長は強調している。

福岡リハビリテーション病院に設置されている歯科。「四半世紀前にリハビリ目的で設けた病院は珍しかったのではないか」と入江暢幸院長

肺炎死も激減

歯科ある病院2割

口腔ケアは不十分

厚生労働省によると2019年現在、歯科や歯科口腔外科といった歯科系診療科を設置している病院は1867あり、全体の22.5%と決して少なくない。九州では207病院(全体の14.2%)。歯学部のある大学病院、地域の基幹病院には大抵設置されている。

ただ診療内容は口腔がんや口腔外傷など重症者の治療、糖尿病患者の歯周病治療、「周術期口腔機能管理」と呼ばれる手術前後の炎症治療や感染症予防などが中心。脳卒中後の入院患者らの口腔ケアや嚥下機能回復支援は不十分とされる。

日本歯科医師会(日歯)によると、こうした病院に勤務する歯科医師は全体の約3%。さらに17年の調査では歯科設置病院のうち常勤歯科医師が1人の病院が40.2%、2人が25.5%を占め、少人数で回している現状が明らかになった。

口腔ケアは肺炎予防や早期回復に有効だ。柳川忠廣・日歯副会長によると、国も歯科医師と連携してそうした治療に取り組む病院に診療報酬上の加算措置を講じるなど推進しているが、マンパワーが不足し手が回っていないという。病院の歯科医師を増やすには時間もコストもかかる。「病院が『登録歯科医師』などの制度を設けて地域で開業している歯科医師に協力を求め、院内外の多職種の連携で患者をケアするのが現実的ではないか」と提案する。

「マンパワー不足。病院は開業歯科医師に協力求めて」

医療面へのご意見、ご感想、情報をお寄せください。「医見異見」への投稿も募集します。紙上匿名はできますが、氏名、連絡先を明記してください。

【ファクス】092(711)6246 【メール】med@nishinippon-np.jp
【郵送】〒810—8721(住所不要) 西日本新聞医療取材班

90歳ですが、1日シャキッこなせるんで

「とても元気で10歳も若くみられることもあります。」 85歳 女性

「もう98歳ですが、お肉を200gは食

「どうしてそんなに元気なのと言われます。」 90歳 女性

さあ、人生100年時代。ずっと元気でいられる自信、ありますか?

昔は、少し休めば何とかなっていたのに…ちょっとした運動も無理なく続けられる元気があればいいのに…と年齢を感じることが増えていませんか?大切なのは体の中から、根本からの元気をサポートする力を摂り入れ続けることです。